

会津三大宿場町のひとつ

西会津町は、越後へ続く会津の玄関口であり、多くの人や物が行き交う拠点として栄えてきました。特に「野沢宿」は、江戸時代に整備された越後街道の三大宿場町のひとつに数えられ、当時の会津藩の行政・経済の要衝であったことがうかがえます。



野沢祭礼



野沢郵便局



野沢駅



野沢町役場



新潟県と福島県の県境に位置し、ふるくから越後街道の宿場町として栄えた会津の西の玄関口・西会津町。人や物が行き交う政治・経済の要衝として、発展を遂げてきました。

会津の発展を支えた要衝

時代を牽引した偉人たち

西会津町は別名「学者の西会津」とも呼ばれ、明治以降に全国的な活躍を遂げた偉人を輩出してきました。江戸時代の幕末、会津藩校日新館に学んだ渡部思齋が、自宅がある野沢宿に私塾「研幾堂(けんきどう)」を設立。野口

英世の手を手術した渡部鼎、アダム・スミスの『富国論』を翻訳した経済学者である石川暎作、エール大学で法律を学んだ野澤雞一、自由民権活動家の山口千代作、小島忠八などの偉人が、この塾から次々に誕生しています。



渡部 思齋 (わたなべしさい)



山口 千代作 (やまぐちちよさく)



野澤 雞一 (のざわけいいち)



小島 忠八 (こじまちゅうはち)



渡部 鼎 (わたなべかねえ)



石川 暎作 (いしかわえいさく)

会津張り子「赤べこ」

江戸時代から明治にかけて、全国各地でつくられた郷土玩具。会津を代表する郷土玩具「赤べこ」は、ふるくから厄除けのお守りや縁起物として、会津の人々に愛されてきました。そんな赤べこ生産のシェアをおよそ7割も占める工房「野沢民芸品製作企業組合」が、西会津町にあります。50年以上にわたり、会津張り子を中心に郷土玩具や民芸品をつくり続けている野沢民芸。心のこもった作品は、道の駅「よりっせ」をはじめ、お土産ショップで購入できます。



西会津の伝統産業・出ヶ原和紙

会津藩の御用紙として使われていた歴史がある「出ヶ原(いずがはら)紙」。その名は伊豆の国から来た者が紙漉きを伝えた事に由来すると言われています。かつての西会津町では、豊富な清水を背景に、良質な紙が町内各地で漉かれ、近隣では「出ヶ原」の名が紙の代名詞となるほど有名な和紙産地でした。その生産は昭和中期に一度途絶えますが、その後再興の動きがおこり、現在は地域おこし協力隊や地元の人たちによって、出ヶ原和紙の文化を繋ぎ現代に生かすため、さまざまな活動が行われています。工房見学や紙漉き体験なども随時開催しています。